安里進の言説には根拠がない －技術検討委報告会報告資料と 2 月 17,18 日琉球新報記事－

永津 禎三

安里進「首里城大龍柱 向きの検証」（琉球新報 2022 年 2 月 17 日, 18 日）では、以下のように、県民に誤解を促す巧妙な主張をする。（以下、マーカーは安里の記述部分である）

「正面か！向き合いか！と決着を急いで対立するより、時間はかかるが、学術的議論をとおして大龍柱への理解を深めていくことが県民の納得できる復元につながると私は考える。委員会は、向き合い復元の「暫定的結論」を出したが、向き合う大龍柱を正面向きに変えることは、技術的に復元工事中でも完成後でも容易にできる。学術的議論に基づく結論に備えて、向きを変更する余地をあえて残したのが「暫定的結論」である。」

▶私は、学術的な議論を深めるために、「絵図の読み」についての疑問を投げかけ続けている。一昨年の 10 月から文書を提出し、新聞紙上等でも何度も論考を示した。琉球新報社説でも指摘されながら、このことについては、全く触れようとしない。都合の悪いことには一切答えず、議論をすり替えていながら、「学術的議論をとおして大龍柱への理解を深めていく」など笑止千万。今まで議論をしようとして来なかった技術検討委員会が今後、突然に学術的議論が出来るとは到底考えられない。

さらに問題なのは、この「暫定的結論」である。まるで、これまでの史料が「前向き」を裏付けているかのような言い回しだが、実際は、唯一確実に王朝時代の大龍柱の姿を捉えたルヴェルトガの写真よりも、解釈の生じる『寸法記』や「尚家文書」を、1846 年から 1877 年までに大龍柱の向きが改変された根拠も無く、これらの絵図を正しいと言い張っているだけの結論である。本来であれば「正面向きにしておく」という「暫定的結論」であるべきなのだ。

後でも簡単に直せると信じているのなら、まずは確定的な史実（ルヴェルトガ写真）に沿って正面向きにしておき、1846 年から 1877 年までに改変した根拠となる史料を発見し、直したら良いのである。

来間泰男沖縄国際大学名誉教授は著書『グスクと按司』の中で安里進「琉球王国の形成」（荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史Ⅳ 地域と民族』1992 年）を批判し、こう述べている。

〈これは、確たる根拠がなく、想像に想像を重ねて論ずる、安里の方法のもっている矛盾が露呈したものではなかろうか。〉

また、安里進の共著『新版・沖縄の歴史』（2004 年）についても次のように批判する。

〈「実証されていない」のに、強弁をくりかえす、安里の論じ方にはますます疑問を深くする。〉

安里が、確たる根拠とならない、ごく僅かな史料から推測した事柄を、あたかも事実であるかのように断定しながら、この推論を重ねていくことは、今回の技術検討委員会報告会の報告資料の構造そのものである。

報告書の「**Ⅰ平成復元の妥当性について−検証結果の報告**」について、以下のように誤りや矛盾を指摘したい。

Ⅰ平成復元の妥当性について−検証結果の報告

２）正殿復元の基本資料について

・首里城正殿は創建以降、災害や老朽化だけでなく**政治的理由**などで何度もその姿を変えてきた。17 世紀以降だけでも、2 回の焼失と再建、2 回の大規模な解体修理が行われた。その度に外観や内部構造が変化してきた。

・そうした経過を経た正殿の復元では、どの時期の正殿を復元するのかを選択しなければならない。当然ながら、**外観だけでなく**内部構造・塗装技法・装飾紋様など全体にわたって詳細に記載された史料にもとづいて、その時期の正殿復元を目指すことになる。

・その史料は、**1768 年の解体修理記録『寸法記』**と 1846 年の解体修理記録『尚家文書』をおいて他にはない。**令和の復元でも両史料を基本に復元するのは妥当**とした。

・ルヴェルテガ撮影の王国末期古写真は、外観の形状は分かるが、外壁の色や塗装技法は不明で、さらに正殿内部の状態については全くわからない。

▶まさに、安里手法の真骨頂とも言える前文となっている。

政治的理由

このことについての根拠や史実を何も示さないのが安里の手法である。

外観だけでなく

最後の「ルヴェルトガ写真」を重視させないための布石である。

1768 年の解体修理記録『寸法記』

現在存在する『寸法記』が 1768 年の原本ではなく写しに過ぎないこと、それゆえ、1768 年に確かにこの外観であったのか確定できないにも関わらず、『寸法記』が 1768 年と安里は強弁し続け、高良倉吉に至っては、報告会で、虚偽の報告「『寸法記』は原本」と報告し、質問によって、すぐにそれが根拠のないものであることが露呈した。

令和の復元でも両史料を基本に復元するのは妥当

絵図に描かれた大龍柱の向きが「正しい」と根拠なく主張し、「絵図の読み」についての疑義には一切応じない。1846 年の『尚家文書』を基本とするとしても、この「絵図の読み」の疑義に明確な反証ができなければ、「基本」通りに復元しようとしているとは主張できない。

ルヴェルテガ撮影の王国末期古写真は、外観の形状は分かるが、外壁の色や塗装技法は不明で、さらに正殿内部の状態については全くわからない

写真史料に何を求めているのだろう。当時の写真がモノクロ写真であること、技法、正殿内部の状態についてわかるはずがないことは、わざわざ断ることではない。これこそ安里の手口である。「ルヴェルトガ写真」がそれほどのものでは無いと人々に刷り込むための記述である。唯一、王国時代の姿が写された写真に、前向きの大龍柱が写っているという圧倒的な「史料」を尊重せず、「正しい」という根拠も示せない『寸法記』や『尚家文書』に描かれた大龍柱の向きにしようとする暴挙を誤魔化そうと人々を混乱させているのである。

５)、大龍柱の「向き」について（安里報告資料 1～Ⅳ参照）

・大龍柱の向きについては、正面で復元すべきだという主張がある。

・大龍柱の向き以外については、**1768 年の『寸法記』**と 1846 年の「尚家文書」を基本に復元することに**異論はない**ので、論点は「大龍柱の向き」と「大龍柱台石の有無」である。

・『寸法記』などの〈台石上で向き合う〉形、王国末期古写真のように〈台石上で正面向き〉、西村氏が主張する〈無台石で欄干に連結して正面向き〉のどちらが**『寸法記』～「尚家文書」の時代**として妥当かという問題である。

▶以上については指摘済み。『寸法記』は 1768 年の原本でない。

・この問題は『寸法記』「尚家文書」にある大龍柱図の**信憑性**をめぐる議論でもある。

▶信憑性を問題にしていない、技術検討委員会が絵図の「読み」を誤っているのではないかと指摘している。

・この観点から、私は、大龍柱の向きについて、大龍柱と不可分の関係にある唐破風と欄干を描いた絵図などの**図像約 300 点余、遺物・残欠 80 点余、古写真 20 余点を総点検**した。その結果。下記について、**新たな事実を明らかにし、または新たな事実をふまえた可能性を考えた。**

▶無意味な事例数であることは、琉球新報で論じた。また、確たる根拠とならない、ごく僅かな史料から推測した事柄を、あたかも事実であるかのように断定しながら、この推論を重ねていくのが安里の手口である。

① 大龍柱と欄干は、15 世紀の創建以後、5 回またはそれ以上作り替えられた。そのうち 17 世紀以後については 3 回またはそれ以上の作り替えがあった。（報告資料Ⅲ-1）

② 17 世紀には、欄干とホゾ組で連結して正面を向いていた（台石はない）。（報告資料Ⅲ-3）

③ **大龍柱の台石は 1729 年の重修で設置された。**（報告資料Ⅱ-2）

▶この台石が次の代の大龍柱にも使われたという根拠はない。

④ **戦前の大龍柱には、欄干に連結するホゾ穴はなく、制作当初から台石上に立てられていた。**（報告資料Ⅲ-5）

▶これがまさに改竄データによる捏造報告である。

⑤ **王府の絵師は、龍頭の正面向きと横向きを描き分けている。**（報告資料Ⅳ-3）

▶絵図の「読み」が誤っているのでないかと疑義を呈しているのに、これは全く論点がずれている。

⑥ **王府絵師が業務遂行上描いた**絵図では、1720 年以前は〈無台石・正面向き大龍柱〉という構図だが、**1768 年『寸法記』～1846 年「尚家文書」の間**は〈台石上で向き合う大龍柱〉という構図である。（報告資料Ⅳ-1）

▶王府絵師が業務遂行上描いたとする根拠がない。『寸法記』は 1768 年の原本ではないので 1768 年からとする根拠がない。

⑦ 王国末期古写真の〈台石上で正面を向く大龍柱〉という構図は、王国末期に**民間絵図**に初めて登場して以後明治期に多く描かれている。（報告資料Ⅳ-1）

▶王府絵師と民間絵図の区分けの根拠が曖昧である

⑧ 王国末期古写真の正面向き阿行大龍柱には大きな補修跡がある。この**補修痕**は、王国末期に大龍柱の向きを変えるなどの改変による損傷があったことを**示唆**する。また、明治期にこの補修

痕の部分から阿行大龍柱が折れたために大龍柱が切断・短縮に至ったと考えている（報告資料Ⅴ-2）

▶「示唆」というように根拠とは言えない事象による推論であり、これを前提にさらに推論を重ねる安里流の典型である。熊本鎮台の暴挙を無罪放免にしたい意図とは何なのか。

⑨ 西村氏が主張する〈末広石階段の欄干に大龍柱が連結して正面を向く〉（台石はない）という構図の絵図は今のところ一枚も確認できない。（報告資料Ⅳ-1）

⑩ **當眞氏の「ノミ跡丸見え」説で、大龍柱の正面向きを証明するのは無理がある。**（報告資料Ⅲ-6）

▶報告書で安里は、ノミ跡は「高くて見えない」と台石が存在することを前提に述べていたが、その前提が間違いだったため、當間氏の説を否定できない。ところがその後安里は琉球新報で、阿形の上顎のノミ跡の方がよく見えるが、あえてこれを主張しないとして、彫師や絵師の個人的な技量レベルでなく冊封関係の中で理解すべきと、また根拠のない理由の方に論点をずらしている。

阿形を例に出したことは問題である。阿形は決して「下に向けて大きく開いた口」ではない。「口内のノミ跡」写真もどの場所が映されたものなのか。阿形は沖縄戦で破壊され、ほとんど実物を確認できない。写真に写っている部分が安里の言うように「よく見え」る場所だったのか疑わしい。

それにもまして、當眞説は鎌首の左右の仕上げ方について論じていて、表側（より人の目に触れやすいところ）は丁寧に、裏側（人の目につきにくいところ）はざっくりと仕上げているという琉球王朝期の工芸全体に通じる特色を意味するのであって、まさに、安里が言うような「見える、見えない」の話ではないのである。

・以上から、**1768 年『寸法記』～1846 年「尚家文書」の〈台石上で向き合う〉形の大龍柱図は信頼できると判断**した。

▶「信頼」を問題にしていないので元々論点はずれきっているが、以上のことから、判断もできない。

・王国末期に〈台石上で向き合う〉形を〈台石上で正面向き〉に変えたために阿形大龍柱が大きく損傷し。**この損傷が明治期の阿形大龍柱の折損につながった可能性**がある。

▶そんなに、熊本鎮台を無罪放免したいのか。歴史修正主義者なのか？

・西村氏が主張する〈末広階段の欄干に大龍柱が連結して正面を向く〉形は歴史上存在したか疑問がある。

▶疑問は勝手だが、反証は正当な根拠を示さなければ、先人の研究に対して失礼である。

【付録】

安里進「首里城大龍柱 向きの検証」（琉球新報 2022 年 2 月 17 日, 18 日）では、以下のように、技術検討委員会が県民に受け入れられていると主張する。

「報告会を主催した内閣府沖縄総合事務局による会場・ウェブ参加者へのアンケートでは、76%が専門分野の報告に満足・ほぼ満足と回答している。」

▶ アンケートの「専門分野からの報告について」の回答は「とても参考になった 58%」「参考になった 18%」であり、「満足」「ほぼ満足」ではない。私も、安里の報告がこれほど杜撰（ずさん）で根拠なく、改竄まで行っていることが分かり、とても参考になった。アンケートの見方もまさに杜撰である。いや、これもわざと間違えているのかもしれない。